

一枚の写真

村路 明

その写真を見たのは、確か十五年も前のことだったと思います。モノクロのそれには、小学生らしい子供たちが松葉杖（づえ）をつかひながら、整然と行進している姿が写っていました。添えられた説明によると、戦争中の教練風景だということでした。

夏になると、戦争の話題が多くなります。新聞やテレビ等もこぞって、それを取り上げます。そして、多くの戦争秘話や体験談が語られてきました。

しかし、例えば、傷い軍人の方や、あるいは一般の戦争で被災され障害をもつことになった方、更に原爆などの後遺症に苦しまれている方も含め、戦争によって障害者になられた方々のお話は、時として伺うことがありませんでしたが、戦争中に障害者として、生きてこられた方のことは、伺ったことがありますんで

した。私自信、障害を持つ者として、少し不満に感じていました。あの戦争中にも、身体などに障害をもち、生活しておられた方がいらしたことは、確かなはずなのに、そうした方々の声が出てくることは、あまりなくて、そのときは個人的な興味の域を出ていませんでしたが、資料等をさがしました。私の不勉強さもあり、ほとんど見つからない状態の中で、一冊の本を発見しました。たくさんの人々の体験談をまとめられた本で、その口絵といった部分に、その写真がありました。

それを見たとき、それまで漠然と抱いていた戦争中は、戦争遂行の邪魔になるものとして、障害者たちは社会から締め出され、隔離されていたのでは、という想像がちよっと違ったものとなり混乱しました。と同時に、障害をもった者までが戦争に協力しなければならなかったあの時代に、恐ろしささえ感じました。

ここに写されている人々は、数少ない人々の一コマかもしれない。多くの人々は、やはり社会の片隅に追いやられていたに違いないと思います。戦争は多くの障害者をつくりだし、圧殺するものだということは、自明のことです。

戦後生まれのわたしには、分からないことがいっぱいあります。とはいえ、この世界中で戦火の絶えることは、現在までも一向にありません。遠くの戦争をゲームのように見てしまふ風潮もないとはいえませんが。こうしている間にもたくさんの人々の命が失われ、障害を持った人々が生み出されているかも知れません。だからこそ、戦争の現実を、それを知っている方々に、語っていただきたいと思えます。そして、私たちは、もっと多くを知らなければならぬと思います。